

偉人の習慣 vol.3

大きな成果は、小さな習慣から生まれる

エジソン

発明家・起業家

豪華な人脈から、情報を集め続けた男

トーマス・エジソン（1847～1931年）は、電灯、蓄音機、映画など1000件以上の特許をとり、世界一の発明王といわれている。

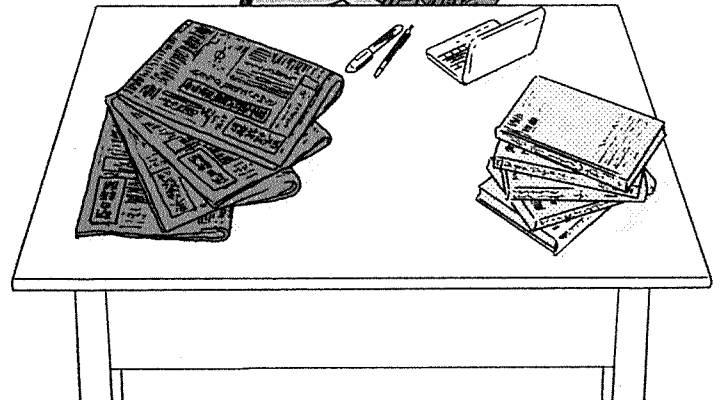
アメリカ・オハイオ州ミラン生まれで、7人きょうだいの末っ子だった。母ナンシーはカナダの牧師の娘で大変教養があった。エジソンは、学校教育が合わず8歳で学校を辞めてしまったが、その後12歳まで母親のナンシーが先生となってエジソンを教育した。独立心旺盛なエジソンは12歳で鉄道の新聞売りになり、空いた時間はデトロイトの公共図書館で勉強した。15歳で自ら新聞を発行し、車内で販売するなど起業家精神にあふれた若者だった。

エジソンの最初の特許は1868年の「電気投票記録機」だった。裁判や議会での投票数を瞬時に判明させ、記録もするものである。当時22歳だったエジソンは、早速売り込みに出かけたが、ニーズがなく、まっ

たく売れなかった。それ以来、売れる物を発明するために、徹底した情報収集、つまり市場調査を始める。彼は毎日5紙以上の一般紙と専門の新聞に目を通した。新聞が届かないと、イライラするほどの新聞好きだった。あらゆる種類の本も読みあさった。15歳で地元の図書館の本をすべて読破した速読家である。

記憶力が抜群で「エンサイクロペディア・ブリタニカ」という百科事典を常に手元に置いて、目を通した。覚える方法は、ページごとに映像化して、脳裏に焼き付けるといえるものである。メモ魔でもあり、好きなジョークのネタから食事会の会話、さらには、夢の中の出来事まで、すべてメモしたという。そのメモの量は生涯で、大学ノート3500冊にもなった。

情報収集には人脈が欠かせないが、エジソンのそれは超一流だった。毎年、自動車キャンプに出かけたのだが、キャンプ仲間が自動車王フォー



ドとタイヤ王ファイヤーストン、著名な自然学者パローズであった。

ほかにゲストとして、当時の大統領、ハーディングやクーリッジも参加している。エジソンは、政財界の大物と親密に付き合い、最新の情報を得ていたのである。

エジソンが食欲に情報をインプットし続けたのは、発明と市場のニーズを結びつけるためである。あらゆる場面で、膨大な情報が決断の後押しをしてくれた。エジソンは単なる発明家ではなく、世界最大の複合企業GEの創業者で、偉大な起業家でも

もある。多くの発明家と違い、発明をビジネスに結びつける考え方が根底にあった。

あなたも単純に情報収集を目的とするのではなく、仕事に役立つことにフォーカスして、情報収集を始めみてはいかがだろうか。



経営コンサルタント
堀越吉太郎

●東京生まれ。世界有数のビジネスコンサルタント、マイケル・E・ガーバーから直接指導を受け、起業家精神に目覚める。「ガーバー流社長が会社になくても回る「仕組み」経営」（中経出版）など著書多数。